



門禁
號 600
卷 54

嬰疾部
秋貌部

夢附

龍澤文庫



崇神天皇五年 国内多疾疫 共々 エヤニ ガシカラ ハルモ 高ハニギアス 有死亡者半矢

疾疫
啞得鷦初言 呪鵠門

病

今五日病ひ死れたる日うち一も湯水も絶へてかきの月のあつきよに火床
とくらでゆりたてぬはあつま肉へ入るあつまめ只すくまくまく
とぞうとゆるみどりをく語どあきのをくまよに翁ひのく年ひの正之
ア石の舟よくわむかくらへてえもひびくとくはあぐく詔うゆが
めすすりやとくのまをくうねば不やくふみすくすくよもやどくく
うつそりうそをまわらひとゆくりくわく足後天よくわくわくわく
うまひくをあくらまをかれ。 改 嘴年育をすく若為日

國二百四十九年六十四

書曰

眼

伊弉諾尊洗左眼因以生神號曰天照大神復洗右眼因以生神

日月讀尊

日本紀

日本紀

鼻

伊弉諾尊洗鼻因以生神號曰素戔鳴尊

日本紀異說

耳

素戔鳴尊年已長矣復生八握耳

日本紀

口

保食神乃四首嚮國則自口出飯又嚮海則贍廣贍狹亦自口出

果紀

頂顧

保食神實已死矣唯有其神頂化為牛馬顧上生粟

神代卷

天稚彥中矢立死先是_{アリシテ}在於葦原中國也與味耜高彥根神友善故味耜高彥根神屏天弔來喪時此神容貌正類天稚彥平生之儀故天稚彥親屬妻子皆謂吾君猶在則舉_{スル}牽衣帶且喜且慟時味耜高彥根神忿然作色曰朋友之道理宜相_{シテ}而故不禪汚穢遠自起哀何爲誤我於亡者一則其帶劍大葉刈以砌_{スル}仆喪屋此即落而為山今在美濃國藍見川之上喪山是也世人惡以生誤元此真縁也 日本紀

皇孫且降之間先驅者還白有_{アリ}神居天八達之衢其鼻長七尺背長七尺餘當言七尋且口尾明耀眼如八咫鏡而絕然以赤酸齧也即初天鉗_{ムツミツ}而問之是乃猿田彦大伸也 日本紀

胸

木華開耶姬生兒時以竹力_{カキ}其兒勝_{カサラ}所棄竹刀終成竹林紀

自異

夢 萬得部靈

天皇神武与皇子牛研耳命師軍而進至熊野荒坂津_{ホウノツ}敷津_{ハセ}因_テ時神吐毒氣人物咸庶由是皇軍不能復振時彼處有人号曰熊野高倉下忽夜夢天照大神謂武甕_{タケアカ}神曰夫葦原中國猶聞喧擾之響焉宜更往而征之武雷神對曰雖野不行而下予平國之劔則國將自平矣天照太神曰諾時武甕雷神_{タケアカ}謂高倉曰予_{スル}御房_{ナヲ}曰_{スル}天孫高倉曰唯_シ而唐之明且依夢中教開庫視果有落_{ハシ}倒立於庫底板即取以進之神御紀

以夢定嗣

見帝系門

身

仲哀天皇身長十尺 日本紀

相貌相似

壹伎直真根子者其为人能似武内宿称之形見信義門

夢 豪歸 見鹿門

大熊鷦天皇六十五年百鬼彈固有三人曰富儻其為壹體有兩面各相背頂合無項各有手足其有膝而脚踵力多以輕捷左右佩劍四手並用弓矢是以不隨皇命掠略人民為樂於是造和珥臣祖敷及根子武振熊而誅之仁德也

白髮 武廣國押稚日本根子天皇生而白髮

清寧紀

腰

凡

髮 並見性部惠爐門

夢

廣庭天皇欽明幼時夢有火云天皇寵愛者大津父者及壯大必有天下
寐驚遣使普來得自山背國紀伊郡深草里果如所夢竟狼門

面見山之郊

侏儒

天智天皇十年春三月常陸國貢中臣部若子長尺六寸其生年丙辰
至此歲十六年也 日本紀

首

ねつが首島あひ多々三月まへ其に度て於生や眼も
ふ塞上者子育を嘗て斬行其體色の如くゆ。此子生れ頭強
今一軍せんと重き吸ひ多々人をも恐怖しらむる時
通ひ人をも害くねつて朱うより斬行。儀後をく諒す
と後うけづりの育ひを多ひる眼忽ち塞

形貌

元末將の合戰地每處は板子塙に兵士勝鎧藍太刀弓箭胡籠を
立木一株より立せ因毛の馬子等とひ時一所すとま近時も一時より
と近ちも立てねむ所とおのれを年後もえよ況か得そりもそれハ完
結ノトキノもあひゆく七弦のねつ書をうへてモセシモセシモ痛く
痛く六波の兵事くはれとる絶よ將門大久保御子もあを平地

洛陽大仙殿門前

耳

立傳傍つたぬ明後のあす草原あさく書とまく件の草紙

農臣秀吉公朝鮮征伐時於彼地土卒得韓人之首級則獻海路之迂遠殺其首之耳皇贈日本公

大仙殿前築大塚納耳皇於其内建塔於其上

世号耳塚蓋效源賴義所建近江国耳納寺之例者

東海道革

アワテ
北國二
緑石今
梅子
尚爾が人名軒下ニテリ

アリ所く入をかま雖五日をかく

アリ所く入をかま雖五日をかく

アリ所く入をかま雖五日をかく

アリ所く入をかま雖五日をかく

アリ所く入をかま雖五日をかく

髮

門

元来將の合戦は毎あは板と均に兵士勝 銀太刀力弓胡旗をも
ちて一船より出立せ因もの鳥子乗りとひ時一所すまむ近所も一時より
と近身も立てぬれ所とおのれとを命綱もよす況か得するるあれハ家
紹の不ぞうしありのれ、七隊のねつ書をもくとせやふ所よも痛く
筋く六隊の兵事くけれとて將門一人も脚すくある平地

洛陽大仙殿門前

耳

実公良振

奥州九生

お津防つた西國度のあす事あらじとまこと件の事

手首加賀屋正

于朝鮮所折

仕子ノシテ於青奥州の浮因を付さひぐくの連をもと付の事

海賊三五支

入目付 実振

引手一ゆくヤクルトアツセツリエツト工年の事跡物ナキ

鼻三万支

九千一万五千

テ衣る者ノ片手を切集めててりてほ子二千子ス在て

後竹中島外境見

建主一ノ耳仰

テ衣る者ノ片手を切集めててりてほ子二千子ス在て

利民ア尼川主殿父熊谷

始復巡り幅二間掘觸體

テ衣る者ノ片手を切集めててりてほ子二千子ス在て

北百二

九千一万五千

テ衣る者ノ片手を切集めててりてほ子二千子ス在て

相手千

相手千

テ衣る者ノ片手を切集めててりてほ子二千子ス在て

髪 田口

元来物の合戦は無事に板付均に兵士勝 銀太刀力弓胡簾
只く一柄と出立せ同色の馬子乗とふ時一所子を退け一時より
と遠ゆも智れりとおのれを免從も又子況分得するもあれハ安
樂ノ事也しありの如く七弦のねつ書をうへてモヤフ所すと痛く
あり共多く付託し給子將門一人を歎するあを平地

子年後後御所御内方車の苦境を免んと
の首各方の良片耳と取て貯留すひとすの員
ニテよき一茎と更に之耳と納め佛圖と
と早一彼ニ卒の惡毒を除ひるあを危

アリハト入を左近至るを知りて其處に於て日を度
タヘ天の手れとてかくとて數とてとつて月とてかくとて
カクとて月とてかくとて入を尋ねてあらざるを覺たれたり
アリハ古木とてさんとてゐるがくとてかくとて人體の肉とてかくとて
たる人の身のよきの眼とて出でるがくとてかくとて人體の肉とて
キモセビ食ひうるもさうだるをうそとてかくとて人體の肉とて
かくとて月とてかくとて入を尋ねてあらざるを覺たれたり

髪 ④ 管

加賀守の屋敷の門を出立て先達を仰あは前をゆきすすみを
テ子やあうえ坐をあうての右あくとえくとえくとえくとえ
久の沖の空をとておとておとておとておとておとておとて
あうてあうてあうてあうてあうてあうてあうてあうてあうて
そらの空をとえくとえくとえくとえくとえくとえくとえくとえく

それとてうそかまきのうとううつまく、とてやせんせう、白雲
アシガムニエツク、テ、多事のうひに、ちかう、れ極、ひく、年半を、れあて
スギテ、うそん極、セモ、マレ、テ、極、ひく、日、アフ、シ、ヒ、シ、ウ、
リ、アホ、テ、シテ、ナカ、モ、後、を、タ、シ、ヒ、タ、ル、モ、アハ、シ、ウ、キ、
タ、シ、ヒ、タ、ル、モ、アハ、シ、ウ、キ、ア、ハ、シ、ウ、キ、
タ、シ、ヒ、タ、ル、モ、アハ、シ、ウ、キ、ア、ハ、シ、ウ、キ、

唐書卷之五十一
唐高祖武平二年

鼻

屋敷、了帳、トニ、男使、處、の、小、難、付、を、せ、す、し、事、所、だ、ぐ、る、と、手、平、
細、み、財、主、の、で、あ、り、の、室、外、き、當、め、仕、事、す、う、以、生、氣、を、運、動、
さ、づ、く、九、列、の、え、す、ゆ、内、腹、を、む、か、れ、う、仰、す、そ、き、そ、れ、く、も、ま、ま、
か、ほ、エ、難、経、事、主、ま、ま、く、あ、ら、む、も、脳、セ、ト、ん、因、と、く、そ、ん、走、と、く、ま、
じ、ひ、そ、そ、そ、く、づ、い、か、來、す、ま、ま、う、と、る、い、そ、の、う、お、の、き、タ、豊、度、の、骨、又、形、
格、た、立、地、質、く、り、う、と、く、鼻、の、ま、う、く、れ、か、ま、う、宣、ひ、く、す、ま、の、度、

形貌

ま、の、度、高、度、萬、の、軍、の、難、付、を、せ、る、の、度、子、を、出、候、難、法、衣、の、立、す、所、て、肩、
ち、す、く、せ、の、ひ、き、う、と、る、姿、貌、優、良、く、う、ら、内、貌、と、ま、の、度、

西、品、御、素、懷、偏、學

形貌

本、之、礼、未、尽、水、菽、之、
而、平、治、有、革、最、周、
之、給、之、後、以、每、日、轉、
法、華、經、被、備、沒、後、
福、而、今、極、榮、貴、給、
以、今、被、^企加、藍、作、事、
先、考、御、廟、於、其、
入、存、忘、辭、之、同、

おれにそろひきのうをやせんからうりやうへ
アリカシムは其のうちからそれ相合ひて年半をもて
見えよと人相合ひてそれより相合ひてあそびにせん
がおとこひきの後をうがひ青色をわざるやせんからう
白髪をうがひ青色をせんからうのうへをうなぐ相合ひ
後をうがひそやうにあせてはとせてもうかね
て年が経て白髪をうがひとくらみでうやぐとそくそくを
あまゆくとくさんとくらみでうやぐとそくそくを
わらわとくらみでうやぐとそくそくをうやぐとそくそく
うやぐとくらみでうやぐとそくそくをうやぐとそくそく

鼻

唐書曰高祖天年七十

屋敷うがひ二男建庵のひ重村をほそく一苦原、
細々財産のひあらひく家をうがひすくにあひに連動を
あざく九列のえをうがひし内をうがひうがひすくも、
山にふれ給ひ事件あるくうがひうがひうがひうがひうがひ
うがひうがひうがひうがひうがひうがひうがひうがひうがひ
うがひうがひうがひうがひうがひうがひうがひうがひうがひ

形貌

至るの屋敷事務の年が相合ひはらひのうをうがひ法衣の立子序へ

うすくざつひうがひうがひうがひうがひうがひうがひ

東鑑 二品御素懷偏以孝 独體

為本之礼未尽、永寂之

酬而平治有事嚴周

大七給之後以毎日轉

讀法華經被備役後

追福而今極榮貴給

之故今報企伽藍作事奉よひとくらみうがひうがひ

可安先考御廟於其地

玄由存忘離之間

潛被同奏此由法皇

亦歎感勲功之餘去

二日御判官於東獄

門也波尋出故左典

底首相副正清里了

醉酒首江判官公

朝馬勅使被下之

今日元曆三年下著仍

八日批

三高為令奉迎之茶

向自稻瀨河邊即

遺骨者文章上人

門第僧等奉懸

頭二品自奉請取之

還向于時改前

御裝束緑色著素

服東治

碑

聖文也上人也主也一集有後事而死而死事
傳也又集詩一卷也主也一卷也傳也のより傳也
多もとと上人のつもくも物也却て却て傳也とを投傳也
おぞやくもゆ稀却稚の因のておぞやくもゆ稀也とおぞやくも
玉からす天皇の内主と人也傳也とおぞやくもゆ稀也とおぞやくも
やさんからす人云ひ候年不寛、おぞやくもゆ稀也とおぞやくも
のとく達く、これをるおぞやくもゆ稀也とおぞやくもゆ稀也とおぞやくも
あておぞやくもゆ稀也とおぞやくもゆ稀也とおぞやくもゆ稀也とおぞやくも
おぞやくもゆ稀也とおぞやくもゆ稀也とおぞやくもゆ稀也とおぞやくも

鼻

ひづれの屋子移除内供とよ修もとみ内供とよモリタモニ
サリルル御ひづれの屋子移除内供とよ修もとみ内供とよモリタモニ大林のと

其比鎌倉中ノ軍勢共六カ東切トテ髪ヲ短クレキハ將軍ノ髪ヲ紡ガ芳
為ナリ太平記

夢

或時相模守貞時鶴岡人八幡宮ニ通夜レ給ケル曉ノ夢ニ衣冠正クシタ左翁
一人枕ニ立テ政道ヲ直クメ世ヲ久ク保シト思ハ心私ナリ理ニ不暗青磁左エ門ヲ
賛スヘシト牋ニ被示ト覺テ夢忽覺テケリ相模守夙ニ帰近國ノ大庄八
箇所自筆ニ神仕ヲ書テ青磁瓦工門ニラ給ヒタリキ青磁瓦工門神仕ヲ
啓キ見テ大ニ驚テ是ハ今何事ニ三万貫ニ及フ大庄給リ候ヤラト同奉リ
ケレハ夢想ニ依テ先日充行也ト答給フ青磁瓦工門額ニ振テサテハ一所モ
足ソ賜リ候ニシレ且ハ御意ノ通モ歎入テ存候物ノ定相ナキ喻モ始夢
勿泡騒如露亦如電トヨツ金剛經ニモ説ヒテ候（若某力首ノ例ヨト云夢
ヲ被御覽候リ無咎共如夢被行候矣シ故鶴岡ノ忠厚メ超塵ノ賓
コ家ニ事是ニ過タル國賊ヤ候ヘキトア則神仕ヲ返し進ラセ瓦太平記

身丈

負主_{源氏}室林修_正四位下兼行宮内卿相模守身丈六尺二寸仁壽_{四年}

二月乙午卒文德実錄

胸

田村九身長五尺八寸胸厚一寸半向以視之如偃背以視之如俯目写蒼鷹
眸_{モリ}鬚_ハ懸_ハ黃金線_ア重_ハ則_ハ二百斤輕_ハ則_ハ六十四寸動靜含穢輕重在意怒
則回眼猛烈忽斃死唉_ハ則_ハ鋸眉稚子早懷_{田村九傳}

鼻

タヒタヒタヒ人降素面_{タヒタヒ}信乃_{タヒタヒ}鼻毛_{タヒタヒ}あらね
大鼻の前へ降まるとひのこの毛を外すてとくとも鼻毛_{タヒタヒ}あらね
ヨロのうくより多_{タヒタヒ}くとくにひのこの毛を外すてとくとも鼻毛_{タヒタヒ}あらね
タヒタヒ_{タヒタヒ}のうくとくも鼻毛_{タヒタヒ}あらね_{タヒタヒ}をこよま_{タヒタヒ}あれ_{タヒタヒ}
の日_{タヒタヒ}タヒタヒ_{タヒタヒ}のうくとくも鼻毛_{タヒタヒ}あらね_{タヒタヒ}をこよま_{タヒタヒ}あれ_{タヒタヒ}

えを下とそろそろとまくと、おれも月下とよつてゆじる事
ありといひが、奥よりの山を上がり、まのうから、うなぎ

香茶部
飲食部

沉水

推古三年夏四月 沉水漂著於淡洛嶋 其大一圍 嶺人不知 沉水以文薪
燒於竈其烟氣遠薰則異之以獻之日本紀

茶

建保二年二月四日將軍家宣元 聊御病惱諸人奔走但無殊御事是若去夜御
淵醉餘氣欬復兼上僧正 侯御加持之丸石此事補良藥自本寺石進
茶一盞而相副一卷書令獻之所譽茶德之書也將軍家及御感悅重慶

鹽

人倫母之郊

薦我。臣大臣為物部二田造塙所斬。皇太子妃薦我造塙。又大臣為塙所斬。傷心痛惋。思聞塙名。所以近侍於造塙者。改塙曰
豎塙。造塙因傷心而致死焉。孝德紀。

沛宴

①
御膳の御事

曲木宴

顯宗天皇二年春三月上巳幸後苑。曲木宴。是時喜集公卿大夫臣連。固造佯。造爲宴。羣臣頗稱。萬歲。日本紀。梅曲木。高初。云。

餅

富士野御狩之間。將軍家督若君。賴家。始令射鹿給此。後。今日。建元四年。御狩訖。屬晚。於其所被祭山神矢口等江間殿。時令獻餅給此餅。三色也。折敷一枚。九置之。以黑色餅三置左方。以赤色三置中。以白色居右方。其長八寸。廣三寸。厚一寸也。以三枚折敷如此。被調進之狩野外。

進^ル舞子餅^ヲ將軍家并若公敷御行騰於篠上令^シ座給上總外江局殿三浦以下多以委候此中令獲鹿給之時候而在御眼路之葦中可燃射手三人被召出之賜矢口餅所謂一口工藤庄司景光二口受甲三郎季隆三口曾我太郎祐信等也権原源太左衛門尉景季工藤左衛門尉祐經海歸小太郎幸氏為餅倍膳持奉御前相並而置之先景光依召奉進蹲居取白餅置中取赤置右方其後三車之三口食之^{始中次左廉}^{次右廉}發矢声太微音也次召季隆候法同于景光次餅置任本體不放之次召出祐信仰云一二口殊射手賜之三口三口將軍可被聞召之趣一旦定答申飲就其禮有與之様可直御計之肯依恩食儲被仰含之礼無左右令自由之條頗無念之由被仰次三人皆賜鞍馬御直金等三人又疎馬弓野矢行騰沓等於若公^{栗原}

飯

天照大神在於天上曰聞葦原中國有保食神宣爾月夜見尊就候之月夜見尊受勅而降已到于保食神許保食神乃迴首嚮國則自口出飯又嚮海則饋廣饋狹亦自口出又嚮山則毛麪毛^ノ自口出夫品物送^テ貯^テ之百机而^テ饗^テ之是時月夜見尊忽然作色曰汝矣鄙寧可以口吐之物敢養我乎廻技氣擊穀然後復命具言其事天照大神怒甚之曰汝是惡神不須相見乃于月夜見之一日一夜隔^ハ日本紀

酒

素戔鳴尊教脚摩乳牛摩曰汝可以裹菓釀八甕吾當為汝^ノ穀地^ヲ二神隨教設酒^ヲ日本紀一說

神日本盤余彥天皇祈之曰吾今當以八十平金無水造飴^ヲ成則吾祭不假

飴

鉾刃之威坐平天下乃造飴即自成日本紀

贈

五十三年冬十月辛上總國從海路渡渟水門是時聞復賀鳥之声
欲見其鳥形而出海中仍得白鷗於是膳臣遠祖名磐鹿六鷹以
蒲為手繩白鷗為贈而進之故美六鷹臣之功而賜膳大伴部記

鹽

三十一年秋八月詔群卿曰官私名枯野者伊豆國所貢之船也
是朽之不堪用然久為官用功不可忌何其船名勿絕而
得後葉馬君羣卿便被詔以令有司取船杖為薪而移鹽
於是五百籠鹽則施之周賜諸國因令造船是以前諸國
一時貢上五百船悉集於出庫木門右神紀

釀酒

十九年冬十月吉野宮時時國櫻人來朝之因以禮獻于天皇右神紀

飯

西念佐木三郎兵衛云吾聞天慶年平將門於東国企叛逆之時以寧治民部
卿處為追討使而羞膳之間聞可有此宣下之旨戶部拋箸起座則參
內給節刀之後不能歸宅直赴洛外勇士之所志以之為善也東性

酒

建長四年九月廿日云鎌倉中所可無制沽酒之由仰保奉行人等
仍赤鎌倉中所可民家所註之酒壺三万七千二百七十四口又諸市酒全分
可停止之由云至治同年十月十六日云沽酒禁制殊有其汝达悉以被
破却壺而一屋一壺被宥之但可用他事不可有造酒之儀若有違
犯之輩者可被付罪科之由固定下私將軍宗尊親王執持其條時行

酒醸

美濃國住人土岐伯耆十郎頼貞多治見四郎次郎國長ト云者アリ共ニ清和源氏
ノ後胤トメ武勇ノ聞ヘアリケハ資朝卿様ニノ縁ヲ尋テ既ニ近ヤ用友ノ文

已三夜カラカリレル是程、一大事高時譯伐ヲ無丘右和セシ事如何カ有ヘラシト思レ
ケルハ猶モ其心ヲ窺見シ為ニ無礼請ト云事ヨソ始ラケル其人數ニ半大納言
師賢、四條中納言隆資、洞院左衛門督、安世藏人、右少卿俊基、伊達三位房
游雅、聖護院廳ノ法眼玄基、足助次郎、重成多治覧、四郎次郎、國長等也。其文
會遊宴ノ體見聞耳目ヲ驚セリ、缺盃ノ次第上下ノイハス男ハ鳥帽子ヲ脱テ
誓ヲ放チ法師ハ衣ヲ不着レテ白衣二十リ年十七八ナルモノ、飴形優ニ層殊ニ清
テホドラ二十餘人、褊スレノ單計ヲ着セテ酌ヲ取セケレハ雪ノ脣スキ通テ大坂ノ
芙蓉荅新ニ水ヲ出タルニ異ナラズ、山海ノ珍物ヨ蓋シ首酒泉ノ如クニ湛タメテ遊
戯舞歌フ其間ニ六只、東夷ヲ可滅企、外ト他事ナレ太平記

飯

とす。今までもうかねもとのときを記しておきます
ヨミコトアホシテ御の御よスラリとスラリけんめ
征くべからうえうえうえうえうえうえうえうえうえ
えうえよくわゆてふたぞうすまよまよまよまよまよま
をうえとくまうえとくまうえとくまうえとくまうえ
えニニニニニニニニニニニニニニニニニニニニニニ
えれとえれとえれとえれとえれとえれとえれとえれと
えれとえれとえれとえれとえれとえれとえれとえれ
とえれとえれとえれとえれとえれとえれとえれとえ
れとえれとえれとえれとえれとえれとえれとえれとえ

鹽

河原處へたびに浮行するがを送るにそり、毎朝三度まで鹽の
奥見本を何の陸面圓、海龜の腹をういては土の鹽をよさうと
あらそらへると、河原處見抄

器用部

船足

伊弉諾尊 伊弉冉尊 已生 大八洲國及山川草木 於是生日神 次
月神 次生 蝙兒 雖已王歲脚猶不立故載之於帆船 磨棹船而順
風放棄 神代卷

伊弉諾尊曰吾欲生御宇之珍子以左手持白銅鏡則有化出
之神是謂大日靈尊右手持白銅鏡則有化出之神是謂月
弓尊又廻首顧盼之間則有化神是謂素戔鳴尊 神代卷

鏡

伊弉諾尊 技所帶十握劍斬軻遇突智為三殿此各化成神矣 神代

杖

伊弉諾尊投其杖是謂岐神

履

伊弉諾尊投其杖是謂折敷神トシマツルノミコト 神仙卷

劍

素戔嗚尊自天而降到於出雲國，簸之川上時，廻川上有啼哭之声，故尋声不覓，往者有一老公与左隣中間置一少女撫之而哭之。素戔嗚尊問曰：汝等誰也？何与哭之如此耶？對曰：吾是國神，号脚乳摩我妻，名乎摩乳此童女是吾兒也。号奇稻田姫所哭者，往時吾兒有八箇女女每年為八岐大蛇所吞，今此女童且臨被吞，無由脫免。故以哀傷素酒以待之也。至期果有八岐大蛇頭尾各有八岐眼，如赤酸醤醬。松柏生於背上而蔓於八丘八谷之間，及至得酒，頭各一口槽飲醉而睡時，素戔嗚尊乃拔所帶十握劍，寸斬其蛇至尾，劍刃缺割裂其尾視之中，有効此所謂草薙劍也。注一書曰：本名天瓊杵，劍蓋大蛇所居之上，崇雲氣故次名。次至日本武皇子改名曰草薙劍。トトロニタスラムト申ス

矛 見天部

伊弉諾伊弉冉二神坐于高天原曰：當有國耶？乃以天瓊矛畫成破取處

鏡

天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰：吾兒視宝鏡瀧猶視吾可與同床共殿，斯為齋鏡。トトロニタスラムト申ス

劍カミハタ 得御靈ミタマ 見夢門

船

崇神天皇十七年秋七月丙午朔詔曰：船者天下之要用也。今海邊之民與無船以甚苦，步運其令諸國俾造船。冬十月始造船。トトロニタスラムト申ス

木刀

崇神天皇十七年秋七月丙午朔己酉詔辟臣曰：武日照命從天降未神宝藏于出雲國大神宮，是故見焉則遣夫田部造遠祖武諸隅而使齋當是時出雲臣之遠祖雲狼根至干神室是往筑。

比弟國而不遇矣其飯入根則被皇命以神宝鑰上出雲振根筑
紫還來岸神室ノホト朝延責其飯入根數日是以既經年月猶懷
恨忿有殺弟之志歟弟曰頃者於止屋淵多生華願共行欲見
則隨兄而往之先是兄空籍作木刀形似真刀當時自佩之
第佩真刀共到淵頭兄謂弟曰淵水清冷願砍共游泳
弟從兄言各解佩刀置脚邊於水中乃兄先上陸取弟真
刀自佩後弟驚而取兄木刀共相擊矣弟不得拔木刀兄擊
弟飯入根而殺之故時人歌之曰椰向毛多菟伊頭毛多鶴流餓
波鶴流多知菟頭羅佐波磨枳佐微那舞珥阿波礼於是無
病ノロツヒコ美韓日狹鍛入多ウカツク鷗濤渟カハケラ之子ミタニ向朝延曲奏其狀則遣
吉備津彦ナガハシ舟渟河別以誅出雲振根日本紀

劍

草薙

見火門

劍

草薙

見火門

舟

舟

舟

一
天智天皇五年科伊豆國令造船長十丈船既成之詔序日本紀
便輕泛如馳故名其船曰枯野古野右神紀

舟人

船人

見鹿門

漏尅

漏尅

漏尅

天智天皇十年黃書本實獻水泉夏四月丁卯朔辛卯置漏尅於新始日本紀

候時動鐘鼓始用漏尅此漏尅者天皇為皇太子時始親所製也日本紀

漏尅

漏尅

漏尅

紙墨

紙墨

紙墨

天智一十年大炊省百八昇鳴或一昇鳴或二或三俱或八俱鳴日本紀

推古一十八年春三月高麗王貢上僧曇徵法定曇徵知五經且能作彩色及紙墨并造碾礎蓋造碾礎始于是時大炊日不紀

鏡

鏡

鏡

雄略天皇三年夏四月阿闍臣國見持牛讐榜幡皇牛至湯入廬城連
武彦曰口底彦汗皇女而使仕舟武彦之父枳吉喻聞此流言恐禍
及泉誦車武彦於廬城河傳使鶴鷗沒水抽魚因其不意而射殺
之天皇遣使案同皇女ニニ對言立不識也俄而皇女發持神鏡詣
於五十鈴河上伺人不行埋鏡經死天皇疑皇女不在恒使周夜東西
來覓乃於河上虹見如蛇四五丈者堀虹起處而獲神鏡移行未遠
得皇女屍割而觀之腹中有物如米水中石積苔喻由斯得皇子
罪還悔殺子報殺國見逃匿石上神官日本紀

弓矢⑦

寛治三年臘月令役の傍子相模國役人薄志拉以東加二子椎守
弟正生年十六志心腹別りテ後至多かの若子二子を取
三と憑するを所からレシ多かの服を射て身を尼内ヤハセ
めりの木と後ギヤアの欲と射て首一弓ナリトモムナラヌ
任へ三脚ホモノカヒシテ折れキタヒタニキモ家を押一戸ナリ
折れ木ヒテ年少の筋毛の根ヒテ折れ木を失フニキモ折せざる次
加母セモナリキモ次公草搾ヒテ草ヒテ家を宣んとテ子以降
キモナリキモ次公草搾ヒテ草ヒテ家を宣んとテ子以降
ニヒナリキモ次公草搾ヒテ草ヒテ家を宣んとテ子以降
を射す而キモナリキモ足サク脚ヒテ脚ヒテ脚ヒテ脚ヒテ
年少膝を屈ム脚ヒテ脚ヒテ脚ヒテ脚ヒテ脚ヒテ

弓矢

左馬頭頬光朝ヒテ若牛ニ食豆茎ガセ椒花寺シテ水破無破失
雷上動のらと投得ムヒヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツヒツ
モモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

10

矢

和

長のあら御事の新中納言の事
即ち紀行の取扱を通
至れりと申すと、年老ひあつて、さういふ所へおもむく事も
少く、されば、あるのれども、まよえうて、やまく、それも、やがての處に至りて、まことに、
その國へゆるのゆゑ、やまくねむのゆゑ、やまく、つづりゆる、てゆる事より
日本と申すと、まことに、ゆきゆき、身とぬけて、いざる事ある

車

おもて
なれども御代をうけたまふ車とひきはぎと云ふ事
アリテ年のもとがころんとおのづからぬせんやそし
れ去るときより ゆすれつゝと云ふれりあらそくもひきとつてゐる
そんそんや年ごとに見ゆるひるのすみをとむる院の門とある門也
そ車ひきともとあれひ京のまことに五箇所の車
すれども車ひきともとあれりかくとてまよへてまよへて
くる牛ひきひきと車ひきかよまよひきと車ひきかよ

石

五

軍をとどめ候事の如きは、そぞり列坐す。相手に足り

弓

御簾三事存するよ後はの御前御所をあつておまくつる事
アヘンもあらうが、兵の事うる角ふる事ありて列車の軍の事うる事
トキテのニシカミされしもみとの事たかがさの事もあらひ、其事
されば、方の御列車うちとれられ、御列車うちとれられ、御列車うちとれられ
タリも、多き事あらまどきとて、なまくとて、万をぬくとて、なまくとて、萬を
御列車うちとれられ、御列車うちとれられ、御列車うちとれられ、御列車うちとれられ
タリも、多き事あらまどきとて、なまくとて、万をぬくとて、なまくとて、萬を
御列車うちとれられ、御列車うちとれられ、御列車うちとれられ、御列車うちとれられ
タリも、多き事あらまどきとて、なまくとて、万をぬくとて、なまくとて、萬を
御列車うちとれられ、御列車うちとれられ、御列車うちとれられ、御列車うちとれられ
タリも、多き事あらまどきとて、なまくとて、万をぬくとて、なまくとて、萬を

劍

東邊 文治元年九月十九日記云。法皇御護御劍去年紛失。去比江判官公朝永
得之。今献上之。風雨之間。今日二品以御書。被御公朝是以左典麻太刀
所被奉獻也。吹丸薄鳩云。云先考御重宝再備。朝家御護之條。依爲御
眉。今及此所儀。

東邊 三丁守範頼朝臣恭著吉月廿日自西海入洛於鎮西尋取仙洞。重宝
御劍鶴丸。今度進上乾是平氏黨類壽永三年城外之刻清徑朝臣
自法住寺殿取御劍二腰。吹丸其隨一也。文治元年九月
追討也。文治五年七月
八日之記

旗

東邊 千葉外常胤獻新綱御旗。其長仕入道將軍家。頼家御旗寸法一丈二尺二
幅也。又有白絲縫物上方伊勢大神宮八幡大菩薩下縫鳩二羽。相對置。為與別
追討也。文治五年七月

東治

文治五年七月十六日今立宇都宮給之處 依舊列泰衡

佐竹四郎自常陸國

征四訓也

追參加而佐竹所令持之旗無文白旗也二品令給之給与御旗不可等
之故也仍賜御扇出月於佐竹可付旗上之由被御佐竹隨御旨付之

額 衣車門

承万元年七月十六日の御上

以テナシ代次赴唐典のちるの大元家も傳と
とすとそとそとそとそとそと

の御法ハち心ニ京の火元惠化手そくの草木のゆすよ御辛とのがとそとそとそと
至年天皇之御事ハあらわしちきれりあたるの家を千次子泣のゆれとく鳥居
おがくとそとそとそとそとそとそとそとそと
吉院寺の草創とく遠場うれくとそとそとそと山門の不れいとみひのと例とそとそと
あらまつて既鳥居の上にそとそとそとそとそと
御主とそとそとそとそとそとそとそとそと
御主とそとそとそとそとそとそとそとそとそと
御主とそとそとそとそとそとそとそとそと

御上

額

文治五年七月九日云伊豆國願成就院地畔為被構三品御病館祀土忽堀出
古額其丈願成就院云云星岸運轉遠近雖難量靈點之鮮奸蹤跡猶
無宿几件寺者依泰衡征伐御祈北條殿草創之併如丹祈寺号又仕
御心願之所催兼撰定之外重今一字之無違有自然之嘉瑞即加於
鋪被用干當寺之額 東治

御上

多御院御上多御院の事と能を抱てて般あれくちぬれうとそとそと
えとそとそとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそとそと

七方ともうなみの多きをもみの舟の二丈・斗のじきりとせよとしむゆいの
のくとあらわせのれんのくらいとるふうのこゝとやそれへんち刀も力もほへ
き入甲としぬてまでんぐり 四ヶの世のものとすまへよハ候ふとすは

船

建保四年十一月十四日云 将軍家為^{ノアシタ}拜先生御住所医王山給可令度唐御之由
依思食立可修造唐船之由仰宋人和卿同五年四月十七日宋人和卿造
畢^{メシ}唐船今日召數百輩定夫於御家人^ニ擬^{シテ}浮^シ彼船於由比浦即有卿
出右京兆監臨給信農守行光為^ハ今日行事隨^シ和卿之訓說^ハ諸盡^シ筋
力而曳^シ之自午刻至申刻然而此所之為^ハ體唐船非可出入之海浦之
間不能^シ海出仍還御被^ハ私徒朽^ハ換^シ干砂頭 東院

金

貞応三年三月十八日若君^ハ經御亭^ハ金殿^ハ金耳^{アマ}疏生^ハ仍被^ハ行御占之知
可有聞食驚事又寅申歲女房可被^ハ慎^シ之由陰師五人^ハ令連署^シ申之 東院

旗

宝治元年五月十八日云今夕有光物自西方亘東天其光暫不消于時秋田
城以^ハ景甘繩家白旗一流出現人觀之 東院 松云今年泰村謀叛及合戰北犯

扇

安貞三年五月十三日云今日評定以後相州武州駿河前司後藤判官信
濃民部大夫入道等被^ハ參^シ御所^ハ將軍家^ハ任召出^ハ扇令置^シ干彼人^ハ中
給各以^ハ目增勝負^ハ賜之当座典也 東院

弓

今月十四日白弓既出^シのあり^シ後初十日を計せぬに三日を過ぐて
矢矢の上を射^シて見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハ
之はす向^カせ^シて見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハ
矢矢の上を射^シて見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハ
之はす向^カせ^シて見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハ
矢矢の上を射^シて見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハとぞ見事^ハ

劔

多田ノ滿仲アリ時宣毛ト可守天下者ハヨキ太刀ヲ持テハ如何セニトテ鐵ヲ集鍛冶ヲ吉
太刀ヲ作ラセテ見給フニ心ニ就太刀無リケリ可如何ト思ハレ尤外ニ或者申様筑前
國三笠郡土山ト云外ニヨフ異朝ヨリ鐵，細工渡テ數年候ル被ヲ可被召假ヤシト
申ケハ則被ヲ都ニ召セ太刀ヲ多作ラセテ見給（共一モ心ニ不付空ク可下ニテシ
有テル被鍛冶思ケル）我篠紫ヨリ遠ヒト被召無甲心又罷下ナハ細ニ名シ矢
ニユソ心亘夏ケレ昔ヨリ今ニ至ルテ佛神ニ申事ノバコフ祈禱ト云事モアラメトテ
八幡宮ニ詣ツ帰命頂礼八幡大井願ハ意ニ稱フ劔作出サセテ又（縁）五株
ナフ大井ノ御器ト可罷成ト願書ヲ進セテ至誠心ニワ祈ケル七日ニ滿ユル夜御
市現云汝カ所申不使也疾罷出テ六十日カ際ニ鐵ヲ釧^{キモ}テ作レ最^ヒ劔撰^ヒテ六十三
ト分明夢想有ケルカ細工悦テ社頭ヨ出ニテ其後吉鎌^{ヨシハシ}金^{ヒラ}釧^ヒ作レ最^ヒ劔ニ^モレ
作タリ実ニ最上ノ劔ニワ作リ出ス長三尺七寸被漢高祖ノ三尺ノ劔トモニ^モレ
滿仲大ニ悦テニ劔ニテ右罪ノ者ヲ切セテ見給ニノ劔ハ醫^{ヨシ}ヲ加テ切テケレハ
頸^ヒ切ト名付タリツハ膝^ヒ加テ切ケレハ膝九トソ號シケル太平記〇コノ後滿仲ノ嫡
子相津守頼光ノ時ニ頭領切ラ鬼丸ト号ク蓋美田源次綱一條大官ナシヘ
使せん夜ニノ劔ヲ帶テ鬼ノキヲ切シテナリコノ年頼光瘧^ヒナ病レケル時長安
計ナル法師スルト歩依テ繩ヲサハキ頼光ニ付ントス頼光ヨレニ驚テカト起何者アハ
頬老ニ繩ヲハ付ントスルグ惡キ奴哉トテ枕ニ立テ置レタル膝丸ヲ取テハタト切ルコノ
法師ト見ヘタル北野^ヒ後ナル古塚ニ極ヌル山蜘蛛ニツアリケル是ヨリ膝丸ヲハ
跳殊切ト号クル又テ後六條列官為^{アハ}時ニ至テ二ノ劔吼ルアリ思切^ヒ吼
名音ハ獅子ノ音似^{アハ}名殊切カ吹^ヒ先音ハ蛇^{アハ}音ニ似タリ故ニ思たコハ獅子ノ
子ト改名レ殊切^ヒ名^{アハ}レケル為^{アハ}名^{アハ}吼丸^{アハ}塔ナリケル熊野別当教真ニ互フ教
真ニノ劔ヲ得テ是ハ源氏童代ノ劔也教真カ可持ニ非トテ權現ヘ參セケリサテ
為^{アハ}一具持タリケル劔一ツ失テ片キノキ種ニ覺ケル播磨ノ因ヨリヨキ鍛冶ヲ
召セ師子ノ子^{アハ}本ニメヤモ不違送ラル最上ノ劔ナリケレハ始終事限シ目賀ニ
鳥^{アハ}作レハ小鳥トウ名ケルコハ小鳥獅子ヨリニカ計長サリケリ或時ニ劔ヲ

障、及テ障子ニ寄セ懸テ被置タリケルカ人モサハラスニカラムト倒ル、者固ヘバ
如何ニ叙ユソ轉ヒヌレ摸レヤシコノトテ取寄テ見給ヘト日未ハニカ計長シト思ツル
少鳥カ獅子ノ子ト同シ模ニソ成ニテル不思評カナルキ様ヤアレ截先カ折メルカトテ
先ヨ見レ共サモナレ怪テ柄ヲ見ニ目負、折テ無リケリ五テコヨ見レト柄ノ中ニ分計
新ノ切テ目負ヲ突抜テガリナリト見エタリ是ハ一定師子ノスカ切タルヨト心得テ御
子ニ改名レテ友切ト名ウケタリ△而レテ後為義子ノ歎福子第朝ニエリキニル△
芭夢想ノ示現ニヨリテ友切ヲ本名、號也ニセシテ賴朝ニモうし元暦ノ初年經
類轉、代官トレテ平家ヲ討ノ日熊野別湛増昔教莫力多至ヨリ得タリケル
吼吼毛ヲ義庄ニ渡テナリ、經特ニ後テ薄緑ト改名ス其改ハ熊野ヨリ春ノ山
分テ出タレハウスニトリト名タリ、後判官頼朝ノ不與、ヲ得テ空ノ都上リ元時
薄緑ノ歎福箱根權現ヘ進ラル建久四年五月大八日、夜曾我祐成同五郎時宗
又ノ歎福經ヲ討トキ箱根別當行矣、牛ヨリ薄緑牛モ本名也ノ歎福得テ思フ様
歎ヲハ討タリケルノ後カ膝丸ハ鎌倉破以上太平記歎卷

摘要

鐘

俵藤太秀郷湖水ノ龍神ノ為二百足ノ馬茲ヲ射テケレハ龍神是ヲ悦テ秀郷
太刀一振巻箱一鎧一領頸結又レ、俵一ツ赤銅、撞鐘一ワラ矢テ御辻ノ門葉ニ懸
在人多カヘレトノベケル秀郷都ニ歸テ此箱ヲ切テワカニ更ニ尺ニ事ナレ、俵ハ中ノ納
物ヲ取ル、尽サリ、則貢宝倉ニ滿テ衣裳身ニ餘レリ、故ニ其名ヲ俵藤太トハ云
ケル也。鐘ハ梵砌ノ物ナレハトテ三井寺へ是ヲタマケル文保二年三井寺父上、時此鐘ヲ
山門へ取寄セテ朝夕ニ撞ケルニ敢スコレモ鳴カリケル間山法師共懸し其美ナラハ鳴牒
撞木ヲ大キニ振テニ三十人立懸リテ破ヨトク撞タリケル其時此鐘海鯨吼声
ノ出ノ三井寺ヘカフトソ鳴タリ、山徒弥是ヲ思ニテ無動寺ノ上ヨリメ數チ丈高キ
岩ノ上ヲユ只カレタリ、間此鐘微塵ニケリ今ハ何ノ用ニカ可立トテ其ノレニ取
集テ木寺ヘ送リケル或時一尺計十九蛇秉テ此鐘、其尾ヲ以加キタリケル一夜
内ニ又本ノ鐘ニ成テ此ノケルモ無リケリサレハ今ニ至ニテ此鐘三井寺ニ

アリ太平記

罐子

貞和五年高越後守師泰石河川原ニ陣ヲ取テ近辺ヲ管領セし後ハ諸守堵
社ノ所領一私モ本主ニ不充付又如何ナル極恩ノ者ウ云出レシ此辺ノ塔ノ九輪ハ
大略赤銅ニテアルト観ル辰是ヲ以テ罐子ニ鑄タリニ何ニヨラシスラシト申ケレラ
越後守聞テケモト思ケレハ九輪ノ宝秋一トシテ罐子ニソ鑄サセタリケンケモ今
云レニ不謙處^{ハキナシ}定帆無シテ磨ニ光冷ヒタリ諸國ノ武士共是ヲ聞傳テ我方
ケレト塔ノ九輪ヲ下シテ罐子ニ鑄セん間和泉河内ノ間數百箇所ノ塔暨
共一基モ更ニ一基モ直ルハナリ或ハ九輪ヲ被下コス歟計アルモアリ或ハ真柱ヲ
切シテ九層計殘モアリケリ 太平記大六

劍

鬼丸ト甲ス太刀ハ北條四郎時政天下ヲ執テ四海ヲ鎮ミ後長一尺計丸十鬼夜ニ時
政カ歸枕ニ秉テ夢共ナリ幼共ナリ侵サトニ事度也修驗ノ行者加持スル共
不休陰陽寮封スレ共不立云剣是故ニ時政病ヲ受テ身心苦ム事障シ
或夜ノ夢ニ此太刀独ノ鬼翁ニ変シ告テ云我常ニ汝ヲ擁護スル故ニ彼妖怪ノ者ヲ
退シトスレハ汚レタク人ノキヲ以テ劍ラ探リタリシニ依テ金精^{カヒ}身ヨリ出テ拔シトス
共不叶早リ彼妖怪ノ音ヲ退シトスラハ清淨ナシ人ヲメ我身ノ金精ヲ取フヘント
キリ放ヘテ老翁ハ又元ノ太刀ニ成ヌト見タリケル時政夙ニ起テ老翁夢ニ示レバ
如ク或侍ニ木ヲ浴セテ此太刀ノ金精ヲ拭セ未鞘ニハサニテ卧丸傍ノ柱ニラ立
周ダリト丸々ノ事ナシハ暖氣ヲ内ニ籠シトテ火鉢ヲ近ク取寄丸ニ歎^スタリ
臺ラニレハ銀ヲ以長一尺計ナル小鬼ヲ鑄テ眼ニハ水晶ヲ入齒ニハ金ラリ沈タル
時政是ヲ見ルニ此間夜ナク夢ニ来テ放フ惱レタル思秋ノ者ハセモ是ニ似タリ^ル者
哉ト面影アル心地メ守居タル处ニ抜テ立ダリタル太刀俄ニ倒レ懸リテ比火鉢ノ臺元
小鬼ノ頭ヲカケテ切テソ落シタル誠ニ此鬼ヤ化メ人ヲ惱レケン時政忽ニ心地直リ
其後ヨリ鬼秋ノ者夢ニモ曾テ見ヘサリケリ是ハ奥列宮城郡ノ府ニ三ノ真国
ト云寛治三年精進禦齋ノ七重ニシメラ引キタウタル劍ナリ 太平記
三十二

○額 云沙善日ノ御ニモ入ベレ

其ものをも砕破車を災厄のとれに免れ候ふ氣をうきてまつまほ
仕合て象二枚を販船うち一枚を西の都ともすゑ
おまくもすゑす 知る事多し仕合はまづひくもまよすちく車をす
タリをすふくまづひくもあらつて御車をすまづひくもまよすちく車をす
えむすりタ乃前これとくもちられ質玉ヤシモヤリ。それは草の氣がよき風
てえくもが氣がよけんじゆの系かくすいへうれむ風よくまよ
タリヒキアゲルをすりやうどく 東京本草集第七

紙

古今集毛五枚子紙屋川ハ平野明神へ奉財所拂ひ爲河口若此
所半紙を拂ひ之物拂ひうや紙もわし入スツモソクヤ紙もつゞけ。○
紙今之廉通もあらすのゆき宿拂ひ足ゆもよ便物に河海抄

○額子御書き郎三入

昔大絶品の墨を拂ひての法師ニヤ一うそツイズモニテ

人
名代母の増産すやうをりよ。新浦のうくはの手筋より
名とは大仰な外見ありとぞひきうみうす。名うす一件の筋りうす
か字被きとぞ。してひそひそひそひそひそひそひそひそひそひ
仕合あゆむ経歎のうこまくも年々くうすてえすなまくまでえ
えすとばあらぬたるある名拂ひう御所處そもとくの左の寺僧
すしめんむるて人の事などといふ事すとあれんとくもあれ
る事無く餘をかかへて、あくまでもうそひのえを拂ひ別れ
る事もあくまでもうそひのえを拂ひ別れのうする時とてまつ
りうそひのえを拂ひ別れのうそひのえを拂ひ別れのうそひ
地のうそひのえを拂ひ別れのうそひのえを拂ひ別れのうそひ
のえを拂ひ別れのうそひのえを拂ひ別れのうそひのえを拂ひ

ゆくとすよしよせきもんとまづとおこもみよも
えよよきよれはたよりよかにあくよきよとひ
のよよきよれとよよけよかとよよけよかとよよけ

古今著物集

叙

拔たよよを力ハ故刑れり大聖地放ニ至る也トアリよゆう大蛇守
忠臣至る人よけ方枕の上ニキテがとうよそくと抜く地
名蛇怖く沙よ吹ひを力も弱すとよしの蛇又金の色をと太刀
又拔て大蛇とよぶてけよ立てうぢをとれよとひて抜くと
尔れよ。至るや所

叙

崇徳院内謀叛の時乃至りて有よ傳言よき子息を大人に見て院
年少也。内處のあきよ血刃事件危ふ也。尼國主御衣をよし判官代
すかよ北端よサ被毛ちがむ。作れ被毛とも皮肉を立てばぬよハ白鳥
院御衣元よ豈よあく。由起のつゝ木野をうせきや鏡へよみはす御送物
とぞ。一物が二戸の半身をうせきや鏡へよみはす御送物とぞ。人をあすとぞ
おほやねよ附よす。おがくよみはれへ。也復胸代を力く。世人易美の只ひとを
上空もよきよ思えよみはれへ。冥寂をよ一月天下の珍宝とぞ。將先年れて
即位後五年の内院つゝとセラウムと改名又新院。一年もうちて死して多病す
とぞ。保元物語

上卷

穀

菜

部

林

木

部

莫

實

部

花

卉

部

蠶
桑

莫宿

林

五穀

婚姻

軻遇突智取^{アサヒテ}埴山姬^{ハシマヒメ}生雅產靈^{アマタノミコト}此神頭上生^{アマツシタノミコト}蠶與桑^{アシナガ}眎中五穀^{カニイシナカニ}

五穀

天照太神復遣^{アサヒタノミコト}天熊人往^{アマミノコト}看之是^{アマミ}時保食神實已死矣唯有其神之頂化為牛馬顧上生栗眉金^{アマミ}眼中生稗腹中生稻陰生麥及大豆^{アマミ}天熊人悉取持去而奉進之于時天照太神喜^{アサヒタノミコト}之曰是物者則顯見蒼生可食而活之也乃以栗稗麥豆為陸田種子以稻為水田種子又因定天邑君即以真稻種始殖于天狹田及長田其秋每穎八握莫然甚快熱^{アマミヨシ}日本紀

稻

入城門

仁五年冬十月天皇命上毛^{ヤマモト}郡君遠祖八綱田令擊狹穗^{アマミ}時穗旁^{アマミ}師距之忽積^{アマミ}稻作^{アマミ}城其堅^{アマミ}不可破比謂稻城也^{アマミ}日本紀

稻

天智三年十一月 淡海國吉坂田郡人小竹田史身之猪槽水中忽然稻生
身取而收日ニ到富栗太郡人磐城村主殷之新婦床席頭端一
宿之間稻生而穗具且垂穎而熟明日之夜更生一穗新婦出庭
兩箇鑰匙自天落前婦取而与殷ニ得始富日本紀

嘉木

天武八年十二月丁未朔戊申由嘉木以親王諸王諸臣及百官人等給祿
各有差大辟罪以下悉赦之是年因播国貞瑞稻每莖有枝日本紀

○地統一六年八月癸亥朔癸丑伊勢國司獻嘉木二本地統紀

年革 五度身ニモ入ヘシ

壬午十二月丹原山莊付ノツムカコ年比年革やももくちり
里村のこれとそりとすこしとすこし又なんじひきとくとうすくほ
み里みどりくもむらのゆかみくわくわく法師ものニミナミ
年革やまくとくひれひれひれひれひれひれひれひれひ
とくひれひれひれひれひれひれひれひれひれひ
たりとくひれひれひれひれひれひれひれひ
そひれひれひれひれひれひれひれひれひ
とくひれひれひれひれひれひれひれひ
ひれひれひれひれひれひれひれひ
ひれひれひれひれひれひれひ
ひれひれひれひれひ
ひれひれひれひ
ひれひれひ
ひれひ
ひれひ

麥 人車恩ノ部ニアリ

泉津靈牛追苗伊岐尊時伊岐諾拔陽汎拂此即化成筍魄女以拔
之神印卷

草木

天照大神之子正哉吾勝ニ速日天忍穗耳尊立皇孫天津彦火瓊杵
杵尊ス鳥葦原中國之主然被地多有室火光神及颶声邪神復有
草木咸能言語 日本紀

松

拿旗ノ外ニモ入ベレ

冥毛の中給國別一物也其時高木の名無あらず私をえんとくもの因ミニモテリ
ルも多ひく生えよひうるぬんニテクタナリ有ても氣玉乃もかず中殿やゆく人
とミセシ也あゆのスムアミのねリテモヤドリトモコマヌシムキ内ヤクルムヒ
ハのあらがウル人トヤクルヒモテ御三十六御子ノアリハセドモタキトモセスモ
皆ハ御方の御子モテリトモミシテモトモ御子モトモ御内ヤクルムヒ
シカツモアラモナラサシテ出でまほの御子アリトモカウカウカウアモスモ

至るの御心を以て御坐候す者あり一西より時を以て、毎ニ二段と申す。後
翁の御心を以て御坐候す者あり二段と申す。室方の御心を以て三段と申す。前
不思議多矣。

事

奥信公秉をモトヨヒトホア御親王の御子を帝の本朝ノテニ年號也
梅子セシムモテアミナシ院の少尉の御まテの在るモ桂のノイコトを
シテテモ石を乞ひ多モカシキ。是が御心也。院の少尉の御まテの在るモ桂のノイコトを
御心也。桂のノイコトを御心也。院の少尉の御まテの在るモ桂のノイコトを
タスルモ本宗の御心也。便河ヲハリケルハ大河をテル。御心也。タスルモ
シテテモカシキ。其孫門の御心也。少尉の御心也。カシキ人多モテアリ。あ
をうひヤル。时の御心也。三佐中翁と云ふ者有也。亨は自然の御心也
タスル。桂のノイコトを御心也。桂のノイコトを御心也。桂のノイコトを御心也。桂のノイコトを
御心也。桂のノイコトを御心也。桂のノイコトを御心也。桂のノイコトを御心也。

蒲陶

伊弉諾尊入於黄泉而走廻帰時伊弉諾尊恨曰何不用要言
出迎共語已而謂伊弉諾尊曰云云言訛忽然不見于時間也伊弉諾尊
乃舉一片之火而視之時伊弉諾尊脹滿太高上有八色雷公伊弉諾尊
驚而走還。是時雷等皆起追來時道边有大桃樹故伊弉諾尊隱
其樹下因抹其實以擲雷等雷等皆退去矣此即桃避鬼之緣也。異說
○伊弉諾尊逃到黄泉平坂則立隱桃樹林抹其桃子三箇待擊者
雷等悉逃還矣云云伊弉諾尊取桃子曰汝如助吾於葦中中國所
頭見蒼生之落苦頗而憲惄之時可助吾而賜曰意富迦牟都夫美命ト

桃實

伊弉諾尊欲見其妹乃到殯殿之處是時伊弉諾尊猶生平
出迎共語已而謂伊弉諾尊曰云云言訛忽然不見于時間也伊弉諾尊
乃舉一片之火而視之時伊弉諾尊脹滿太高上有八色雷公伊弉諾尊
驚而走還。是時雷等皆起追來時道边有大桃樹故伊弉諾尊隱
其樹下因抹其實以擲雷等雷等皆退去矣此即桃避鬼之緣也。異說
○伊弉諾尊逃到黄泉平坂則立隱桃樹林抹其桃子三箇待擊者
雷等悉逃還矣云云伊弉諾尊取桃子曰汝如助吾於葦中中國所
頭見蒼生之落苦頗而憲惄之時可助吾而賜曰意富迦牟都夫美命ト

椎子

欽明天皇星上平佐渡嶋東禹武邑人採拾椎子為欲熟喫著灰裏炮
其皮甲化成二人飛騰火上一尺餘許經時相鬪邑人深以為異取置於庭
亦如前飛相鬪不已有人石云是邑人以為鬼所迷惑不久如言日本紀

推古天皇二十四年春正月桃李實之日本紀

桃李

推古天皇二十五年夏六月出雲國言於神戶郡有桃大如正金是歲五
穀登之日本紀

桃李

天武九年春正月攝津國言活田村桃李實也日本紀

櫻花

去來穗別天皇三年冬十月天皇泛兩枝船于磐余市破池与皇妃
各分乘而遊宴膳臣余磯獻酒時櫻花落于御蓋天皇異之則召
物部長貞瞻連詔之曰是花也非時而來其何處之花矣汝自可
宋於是長貞瞻連獨尋花獲于坂上室山而獻之天皇歡其希有
即為宮名改謂磐余雅櫻宮履中紀

蘭

允恭天皇二年立忍坂大中姬爲皇后初皇后隨母五家独遊苑中時鬪
雞國造從傍徑行之乘馬而莅離謂皇后嘲之曰作園半汝者也且
曰壓乞戶毋其蘭一莖焉皇后則採一根與於乘馬者因以同日何
用求蘭耶乘馬者對曰行山援鑊也時皇后結之意裏乘馬者
辭无究即謂曰首也余不忘矣是後皇后登祚之年覓乘馬乞
蘭者而數昔日之罪欲殺復乞蘭者願捨地叩頭曰臣之罪當萬

死一也。當其日不知貴者於是皇后故死刑貶其姓謂稻置日本紀

桃李

推古天皇三十四年春正月桃李華之日本紀 鈴明十年九月霖雨桃李華日本紀

蓮

錦明天皇七年秋七月瑞蓮生於劍池日本紀 鈴明十年九月霖雨桃李華日本紀

皇極天皇三年夏六月於劍池蓮中有一至二莖者豐浦大臣忘推曰是蓀

戎臣將來之瑞也以金墨書而獻大法興寺丈六佛日本紀

芝草

菟田郡人押坂直名將一童子欲遊雪上登菟田山便見紫菌挺雪而生高六寸餘滿四町許乃俠童子採取還示隣家搗言不知且疑毒物於是押坂直與童子更而食之大有氣味明日往見都不在焉押坂直與童子因喫菌羨美無病而壽或云蓋俗不知芝草而忘言菌耶日本紀

百合

百合日本紀 皇極天皇三年夏六月癸卯朔大伴馬飼連獻百合草其莖長八寸其本異而末連日本紀

廿之草

天武八年紀伊伊刀郡貢芝草其狀似菌莖長一尺其蓋二圍日本紀

橘

成範の下を橘の牛糞をアラシムシモドリケンシタスケテナムリのひをひて西子橘をうきこすとくじゆみのくわる年の去とてふく人橘所シテアリガトモクセウトモクセウトモ天照大御命よりやされれりわやこせうとく名ふスルノ君少主多くすとく多き事も皆所をのす一花もいわくいはすのむらひとくあらひ

梅

承和五年正月九日云自永福寺遷被移植梅樹一本於御所北面大野廟庭種也非濃香之絕妙南枝有燭依之被賞號之東院

梅子

傳云永觀山創愛宕郡禪林寺僧慈仁至京獄舍而向飢寒又禪林有一梅樹每年生子採之施葉王寺病人俗呼名悲田梅山側若歸志

瞿麥

花山院の池の中島よりうのすあり貞保表を本のりの書のてすせのひとて
よきえをゆきをめいひう又四角の島代りくふりうとをひく種されうるれど
花のううとくわくともあくまくうくじんのよひう是よううるる山
のううやくのゆくとくや 菅原集摘要

梅花

萬象左寧府よりうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく
うくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく
世うくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく
世うくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうく
廢離承久年 废鹿於所無主又有花かくやくうくうくうく
多作もゆくかく著サ集メ後拾遺集セうううく櫻の元をよろむ
ちのうううううせくせくいきよかくのうとよくせく かくのうくかくのうとよろ

櫻

禁抄抄曰南殿櫻イ在紫宸殿翼角是大略自草創樹也貞觀此樹枯テ根
絕ス崩坂上畿守夫勅守之枝葉盛徒然メ吉原の不灰也の篇ヒ三之此れ

櫻

右近櫻近都已前人家櫻也康保三年正月十七日仰左右近衛府被移植抄
拾芥抄曰南殿前庭櫻樹依舊跡植之見天曆櫻者本是梅也桓武天皇近都
之日所被植也而及承和年枯失仍仁明天皇被改植樹也櫻本者櫻大夫之
時樹也枝條不改及天德之末見康和年御記

藻鹽草子云左近櫻右近櫻の事より櫻ハた大約石中爲たが列をうきうき

又櫻ハ太大的不中の心ハね列をうきうき陳ハ列をうきうき左右にそよびうきうき
左右にそよびうきうき櫻ハうきうき左右にそよびうきうき

延喜式曰卷十一允神泉花廻地十町内今京職裁ヲ町制

寫宿梅 / 大鏡卷八(アリ)

仇

七條朱雀のあより候脇被とやまとろの吳因の人の毛竹を居る所をえまひ
くる村と脚見れは蜜丸のさと候臘館のあづにありこころよしもむれす
とく大根枚

松

金蓮寺、称四條道場寺中慶松菴庭有大松每年復砌杜鵑未鳴
普廣院義教公在駕廄之依号杜鵑松先年為靈壁靈枯失雍州府志

梅

西誓願寺堂前有梅其花欲開其色甚紅也世未聞紅春初洛人
之奇觀也雍州府志

西念寺在上賀茂南堤下相傳西行法師暫住焉庭前植梅愛觀之
因號登迷古志有梅佐御里奈流我宿之歌尔後謂此梅曰登迷古

始忘之梅至今有殘梗真色淡薄其香芬芳堪愛一說登迷古
加志之歌所題屏風梅畫也雍州府志弘治元年移栽於此石室
うそも人の手をうそされぬと山家集す

歌舞曲部
樂器部

琴曲

歌

允恭天皇八年春二月辛干藤原密察衣通姬之消息是夕衣通郎姬
戀天皇而居其不知天皇之臨而歌曰和鉢勢故鉢向倍根豫臂奈
利佐瓊鉢泥能區茂能於虛奈比虛豫鉢流鉢毛天聰是歌
則有感情而歌之曰佐瓊羅鉢多邇之枳能臂毛弘等根舍氣帝
阿麻多絆臣憂多儂比等用能未明旦天皇見井傷櫻華
而歌之曰波是波辭佐區羅能梅涅許等梅涅磨波那區沒梅涅
搏和我梅豆留古羅皇后聞之且大恨也

日本紀

琴曲

雄略天皇十二年命木工闢鶴御田始樓閣於是御田登樓疾走
四方有若飛行時伊勢米女仰觀樓上怪復疾行顛仆於於庭
覆所攀鑽天皇便疑御田罪其米女自念將刑而付物部時秦
酒公侍坐歌以琴声使悟天皇橫琴彈曰云云天皇悟琴声赦其罪

卷之二

推古天皇三十年百濟人味摩之歸化曰學于吳得伎樂舞則安置
櫻井而集安年令習伎樂舞於是真野首弟子新漢有文二人
習之傳其舞日本紀

僕

皇極天皇元年 壬寅歲大臣蝦夷立己祖廟於菖城高宮而為八佾之舞
遂作樂曰野麻騰能飲斯能歠稜栖鳴倭施羅務騰阿庸比施豆矩梨舉始豆矩四羅荷田 日本紀

四

天武十四年秋九月詔曰凡諸歌男歌女笛吹者即傳已子孫令習歌笛日本紀

琴曲

多喜院仲尼の智略の傳聞によれば、八月十九日未明より、急風暴雨の爲め、屋根の瓦が吹き飛んで、天井板が割れ、柱が倒れ、土間の板が剥げ、床の間に土砂が入り、火事の危険が迫る。この時、おおきな火の鳥が現れ、火を吹き消す。おおきな火の鳥は、火事の原因である瓦を吹き飛ばす。瓦が飛ぶと、火の鳥が吹き飛んでしまう。瓦が飛ぶと、火の鳥が吹き飛んでしまう。

舞童

東溫 言根兒童依召去。夜叢著是為勤仕來月三日鶴岳舞樂也。童八人
增壽。官熊。壽王。閑房。櫛鶴。陀羅尼。祐勒。伊多。石丸等也。於別當坊自吉文落
二月始調樂。山城从奉行^ス文^ヲ。

曲

久々シテ放さる聲をうかと明^ル還已^ル宿占一人ゆひつまうる^ル身所
絶えあきとしゆくよゆきのしるの信^ル行^スあらむ^ルこもひの門^ルみまく
うるる人あらんゆきとしゆくすらりと葉の^ル入^ルまく人有^ルそれとす
是事よりとふ放^ス聲^ス不^スかふとひなれもあらとひなれもあらとひなれもあら^ル事^スか

歌曲

正保ノ比世ノ風曲都巡^リト云唱歌アリ其曰美津ノ御牧々涼尚程近キ八幡山
云云此曲初二春ヲ云テ地主ノ櫻ヲ詠ノ藤ノ社ヲ經テ此所ニ至夏ニ近リ桂ノ里ニ

至テ秋ヲ立^フ也 山城石跡老

琴

初枯野船為鹽薪燒之日有餘燼則奇其不燼而燄之天皇
異以令作造琴其音鏗鏘而遠聆右神紀

鍾

舒明天皇八年七月己丑朔大流王謂豐浦大臣曰群卿及百寮朝
參已懈自今以後仰始朝之已後退之因以鍾為節然大臣
不從日本紀

笙

新羅王弟和光、魚列の城軍以爲唐子と云ふ者之と牛馬の食
馬を殺して食ひて是を多うる事もあらず其の衣服を着て身につけたり
名を冠の名をもとむる者と云ふて肉でもありて刻歎の口外
ちづれぬる也即物の心能をうりて教説をもつて以月日を過ぎ
多々安所に解て鳥鳥附乎京都と西移む下江二十人を遣

東州へとてかたのありのれに西飛のをくわすちかくいわ
ゆきのむとてはるはりてはるはりてはるはりてはるはり
のうそをかはるはりてはるはりてはるはりてはるはり

東船院四年十月八日於毎河國賀鳴武衛与義經對面之記云自河院御掌
永保三年九月曾祖陸奥守源朝臣義家於東州与將軍三郎武衡同四郎
家衡等遂^{合戰}于時左兵衛尉義光^{候京都傳聞此事}據朝廷警衛
之當官解置弦袋於殿上潛下向東州加手鬼陣之後忽被亡敵^記

まよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
あひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
えぬ曲と文子^{金子}とひきんのひきんのひきんのひきんのひきんのひきん
ひきんのひきんのひきんのひきんのひきんのひきんのひきんのひきんのひきん

笛

おまくひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
のまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
まよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
およびゆ^{行儀}とゆよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
まよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ

笛

おまくひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
のまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
まよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ
およびゆ^{行儀}とゆよひてまよひてまよひてまよひてまよひてまよ

東所へりてひきよみそりめうひ度の和はおもよおもへに
くまびらとアトを帶へてせんがはい人平身町村より聖
マの事えどにまかにかねの御殿の御殿おとしも前まよの内はゆしと猶
わらじとせらすれはまよさへまくとはおまくまよの内はゆしと猶
みく神こうじてゆくの内も時取酒假帶とも称せれ
新まくあえれに志を以てまとうと云ふ者も多也時そ
せらむに坐の子すなりうきよは見えたましんと一時一ふせの事

知かうりが言ふ如曲大名の入酒曲^{の三日}をもお見だに處子セラ
タクタクの如軍^{の如見}てりかくくの時處子をあ葉をほるの事
曲と傳てまくと傳てまく事する見だにふはくとゆく事
あらぐくちの如軍^{の如見}てりやも見だにまくからんとゆく事
えぬ曲とゆく事まくと見だにまく事
の音付白えりにて時めが傳はれをよし
おれおれおれおれ^{の音付}とより歌はく是猶心子の事
おれおれおれおれおれおれおれおれ

おとせ
おとせ
おとせはるをあひのひとす大名の酒^{の音付}ニ曲と傳て利田^{の音付}が国軍
の性情と傳て當時木附身^{の音付}の内が时事^{の音付}の事まの内を厚す事
皆さうとぞアトもさうじゆくもと細字^{の音付}とおて繋がる事
内よ被ゆ曲とゆく事のみの内が四事も厚^{の音付}
行儀はとて^{の音付}スミ事
けおれ流を厚ず事^{の音付}とく事前もわざもさうする事^{の音付}とく事
おれおれおれ^{の音付}おれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

笛

ちの金のあれせもとれ小えどとくかん竹のこえを二すらひ下^{の音付}中モ^{の音付}
わらうきの内^{の音付}の内財宋^{の音付}の内^{の音付}とくとくの内^{の音付}をあくとくとくとくとくと
内五音^{の音付}とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
つもくひのうを絶のこゑとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと

カタマクの事は古事記の事
の事も云ひてゐるが、これは
アラム語の事である。アラム語
でアラム語を書くのである。アラム
語はアラム語の書道である。アラム
語の書道はアラム語の書道である。

琵琶

の事はよどてと車をのまう。まくはりとまくはりと五三の御法場原

笛

松浦の名の名のまくはりと車をのまう。笛をとつまう。
まくはりと車をのまう。笛をとつまう。笛をとつまう。
笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。
笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。
笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。
笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。
笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。
笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。笛をとつまう。
青葉のまくはりと車をのまう。笛をとつまう。笛をとつまう。

笛

アカリイ 横山の附若の傍をとくと大蘇原の附道をとくと
附道みゆよやめの子時よこと山道とあらそいりがやく相手をとくと車を

あらそいり附道相手とよこと車をあげ替えと山車とタクタクと車を
タクタク

津澤

